

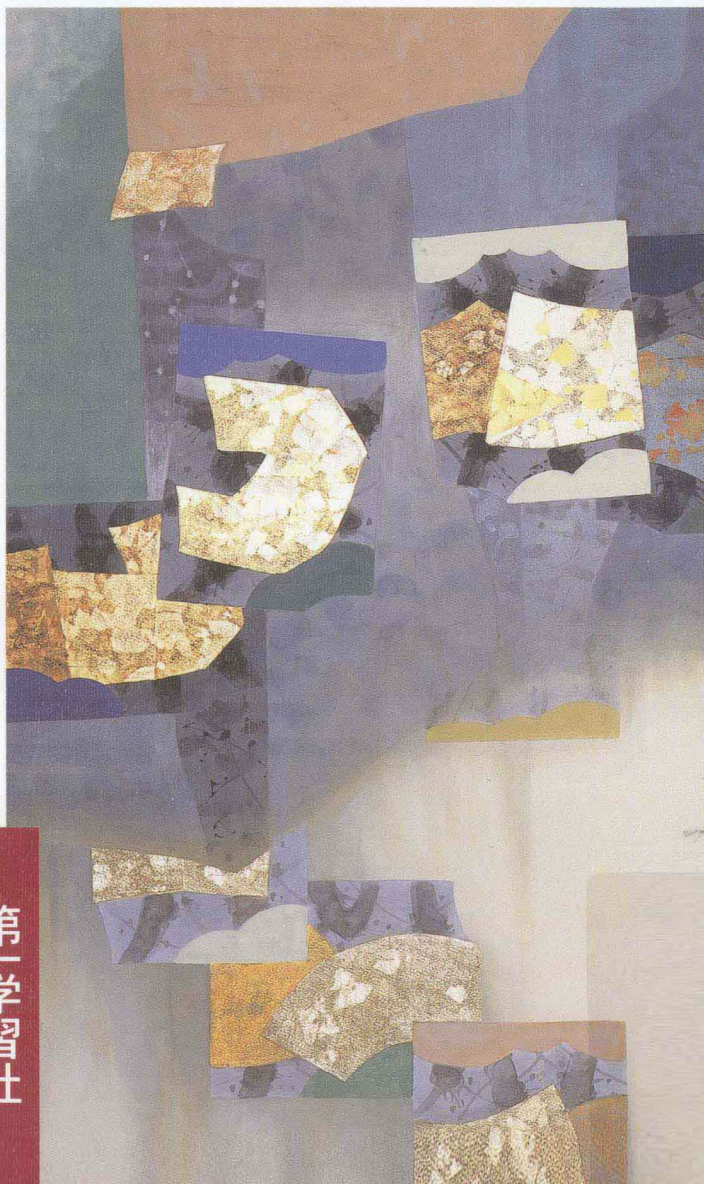
文部科学省検定済教科書 高等学校国語科用

183 第一 古典 044

改訂版
高等学校

標準古典

第一学習社



●著作者

広島大学名誉教授 稲賀 敬二
 広島大学名誉教授 森野 繁夫

大阪大学名誉教授 伊井 春樹
 泉大津高等学校教諭 岡田八千代
 東京女子大学教授 金子 彰

広島大学教授 小谷喜一郎
 広島大学教授 妹尾 好信

同志社女子大学教授 富永 一登
 吉海 直人

●表紙デザイン・レイアウト 川辺一夫

●写真提供先(敬称略) 赤間神宮 旭通信社 アマナイメーجز アルピナ 石山寺 和泉市久保惣記念美術館 出光美術館 茨城県立近代美術館 浦嶋神社 大倉集古館 OPO 岡本茂男 学研 金沢文庫 北野美術館 京都国立博物館 京都文化博物館 宮内庁楽部 宮内庁侍従職 宮内庁書陵部 熊本県立近代美術館 桑実寺 国立劇場 国立国会図書館 国立歴史民俗博物館 桜井市 佐多芳郎 C.P.C. JTBフォト 正倉院 神宮古館農業館 神宮文庫 中央公論新社 長寿院 天理大学附属天理図書館 東京国立博物館 東京都立中央図書館 東洋文庫 徳川美術館 内閣文庫 名古屋市蓬左文庫 夏梅陸夫 ネイチャー・プロ 根津美術館 羽黒洞 林原美術館 范曾美術館 藤田美術館 平凡社 北海道立近代美術館 本居宣長記念館 安田建一 山口直樹 山種美術館 湯木美術館 横浜美術館 吉田幸一

高等学校 改訂版 標準古典

平成十九年二月二十日検定済
 平成二十四年二月一日印刷
 平成二十四年二月十日発行

定価 文部科学大臣が認可し官報で告示した定価

(上記の定価は、各教科書取次供給所に表示します。)

著作者 稲賀敬二 森野繁夫
 ほか九名(別記)

発行者 株式会社 第一学習社
 代表者 松本洋介

印刷者 株式会社 第一製本印刷株式会社
 代表者 松本洋介

発行所 株式会社 第一学習社
 代表者 松本洋介

東京・東京都千代田区二番町五番五号
 〒100-0044 ☎03(五二七六)二七〇〇
 広島・広島市西区横川新町七番一四号
 〒733-8651 ☎082(二三三四)六八〇〇



改訂版
高等学校

常州大学图书馆藏

標準
古典

第一学習社



第I章

目次

説話

博雅の三位の笛（十訓抄）
大江山（古今著聞集）

平中が事（古本説話集）

●コラム 説話に描かれた人物像

物語（一）

竹取物語

火鼠の皮衣

かぐや姫の昇天

伊勢物語

初冠（第一段）

通ひ路の関守（第五段）

小野の雪（第八十三段）

●コラム 初期物語の作者像

随筆（一）

徒然草

公世の二位のせうとに（第四十五段）

相模守時頼の母は（第百八十四段）

吉田と申す馬乗り（第百八十六段）

よろづのことは頼むべからず（第二百十一段）

方丈記

ゆく川の流れ

安元の大火

●コラム 『方丈記』と『徒然草』

貴族の生活と年中行事

和歌

万葉集

二 三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇



絵巻「風と人と」(佐多芳郎筆)

古今和歌集

新古今和歌集

● コラム 春の訪れの表現

枕草子

春は、あけぼの（第一段）

うつくしきもの（第百四十四段）

中納言参り給ひて（第九十八段）

御方々、君たち（第九十七段）

鳥は（第三十八段）

● コラム 清少納言の宮仕え

清少納言

更級日記

門出

源氏の五十余卷

鏡のかけ

建礼門院右京大夫集

大原まうで

● コラム 孝標女の見た夢

菅原孝標女

建礼門院右京大夫

物語(一)

平家物語

忠度の都落ち（卷七）

能登殿の最期（卷十一）

義経記

忠信、吉野山の合戦の事

● コラム 義経伝説の誕生

言語学習

貴族の衣服と色

古今 新古今 枕草子

中納言

御方々

鳥は

更級日記

門出

源氏

鏡のかけ

建礼門院

大原

孝標女

平家物語

忠度

能登殿

義経記

忠信

義経

誕生

貴族

衣服

色



故事・寓話

- 刻_レ舟求_レ劍（呂氏春秋）
- 朝三暮四（列子）
- 病入_ニ膏肓_一（春秋左氏伝）
- 画竜点睛（歴代名画記）
- 推敲（唐詩紀事）

● **コラム** 故事成語の意味

古代の史話

- 鼓腹擊壤（十八史略）
- 管鮑之交（史記）
- 背水之陣（十八史略）

● **コラム** 韓信にまつわる言葉

漢詩の鑑賞

- 中国の詩
- 鹿柴
- 絶句
- 峨眉山月歌
- 春夜
- 臨_ニ洞庭_一
- 遊_ニ山西村_一
- 日本の詩
- 不_レ出_レ門
- 冬夜読書
- 送_ニ夏目漱石之_ニ伊予_一

- 王維 二〇
- 杜甫 二〇
- 李白 二二
- 蘇軾 二二
- 孟浩然 二三
- 陸游 二三
- 菅原道真 二四
- 菅茶山 二四
- 正岡子規 二五

言語学習

対句

不思議な世界

白水素女（搜神後記）



第II章

諸家の思想

● **コラム** 離魂記（太平広記）
愛が引き起こす不思議

論語（六章）

孟子

仁人心也（告子上）

民父母（梁惠王上）

老子

柔弱（第七十六章）

百谷王（第六十六章）

莊子

鷓鴣得腐鼠（秋水）

蝴蝶之夢（齊物論）

韓非子

刻削之道（説林下）

法者王之本也（心度）

言語学習

孔子と老子

昔話と古典

浦島太郎（御伽草子）

わらしべ長者（宇治拾遺物語）

● **コラム** 昔話―口承と書承―

物語(一)

大鏡

延喜の帝（雑々物語）

道隆と福足君（右大臣道兼）

弓争ひ（太政大臣道長）

三舟の才（太政大臣頼忠）

一三三 一三六 一三三 一三三 一三三 一三四 一三四 一三四 一三五 一三七 一三八 一三八 一四〇 一四一 一四一 一四二 一四二 一四三 一四四 一四五 一四五 一五〇 一五〇 一五五 一五五 一六〇



俳諧

鶯宿梅（雑々物語）

●コラム 権力者道長の人物像

一六四

春夏秋冬

●コラム 俳諧と発句

一六〇

物語(二)

源氏物語

紫式部

一七三

光る君（桐壺）

夕顔（夕顔）

若紫（若紫）

明石の君と姫君（薄雲）

●コラム 『源氏物語』と石山寺

貴族の呼び名―官職と位階―

一八七

言語学習

日記

蜻蛉日記

藤原道綱母

一八〇

泔坏の水

紫式部日記

紫式部

一八二

日本紀の御局

和泉式部日記

和泉式部

一八四

夢よりもはかなき世の中

●コラム 日記文学と和歌

一八七

言語学習

平安朝の結婚

一九八

無名草子

清少納言 紫式部

二〇〇

無名抄

鴨 長明

二〇三

深草の里

二〇三

評論



逸話

玉勝間

兼好法師が詞のあげつらひ（巻四）

● コラム 宣長の学問の新しさ

説苑

不_レ顧_二後患_一 圉人之罪

新序

楚惠王吞_レ蛭 不_レ若_二人有_二其宝_一

淮南子

宋人有_二嫁_レ子者_一

● コラム 逸話と史書

歴史の群像

孫臏（孫子呉起列伝）

馮驩（孟嘗君列伝）

項羽と劉邦（項羽本紀）

● コラム 野戦と食料

漢詩の鑑賞

古体の詩

子衿（詩経）

七步詩

雜詩

遊子吟

売炭翁

● コラム 『白氏文集』と日本文学

中国の小説

三国志演義

張飛、大いに長坂橋を騒がす

本居宣長

劉向 三〇

劉向 三三

劉安 三六

三八

三〇

三四

三八

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三六

三三

羅貫中 三四

三四



言語学習

歴史と小説

三三

名家の文章

猫相乳

韓愈 三三

臨江之樂

柳宗元 三三

売油翁

歐陽脩 三三

読孟嘗君伝

王安石 三三

●コラム 柳宗元の動物寓話

三三

古文付録

古典文学史年表

三三

文語文法要覧

三三

平安京条坊図 月(陰暦)の名称 方位と時刻

三三

大内裏図 内裏図 清涼殿図

三三

服装 調度 楽器 武具 馬具

三三

中国文化史年表

三三

漢文重要語彙一覧

三三

漢文基本句形一覧

三三

故事成語一覧

三三

四字熟語一覧
服装 武器 璧玉 楽器 旌旗

三三



第一章



天橋立

説話

博雅の三位の笛
大江山
平中が事

説話は、大きく仏教説話と世俗説話とに分けられる。仏教説話は、靈驗記や発心譚、往生譚などを伝えるもので、もともと仏教の教えを説くための資料として文字化されたものである。世俗説話には、奇異な話、滑稽な話、同時代の人物のうわさ話や歴史上の人物の逸話など、実に多彩な話題がある。

これら説話は口承された話を文字を用いて著したもので、文体も内容も素朴であるが、さまざまな階層の人間が生き生きと力強く描かれていて、時代の息遣いを感じ取ることができる。

ここでは、著名な人物の登場する世俗説話三編を取り上げた。時代を超えて通じる人間性の機微を読み取り、説話のおもしろみを味わってみよう。

博雅^{はくが}の三位^{さんみ}の笛

十訓抄^{じっくんせう}

博雅^①の三位、月の明かりける夜、直衣^②にて、朱雀門^③の前に遊びて、よもすがら笛を吹かれけるに、同じさまに直衣着たる男の、笛吹きければ、「たれならん。」と思ふほどに、その笛の音^ね、この世にたぐひなくめでたく聞こえければ、あやしくて、近寄りて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。我もものを言はず、かれも言ふことなし。かくのごとく、月の夜ごとに行き合ひて、吹くこと、夜ごろになりぬ。

かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、試みに、かれを取り替へて吹きければ、世になきほどの笛なり。そののち、なほなほ月ごろになれば、行き合ひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らん。」とも言はざりければ、長く替へてやみにけり。三位失^うせてのち、帝^{みかど}、この笛を召して、時の笛吹きどもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。

10

5

①博雅の三位 源博雅(五二八―九〇)。

醍醐天皇の孫で、音楽の名手。

「三位」は、宮中での序列を表す

「位階」の一つ。

②直衣 男性貴族の平服。二七四

ページ「服装」図参照。

③朱雀門 大内裏南面中央の正門。

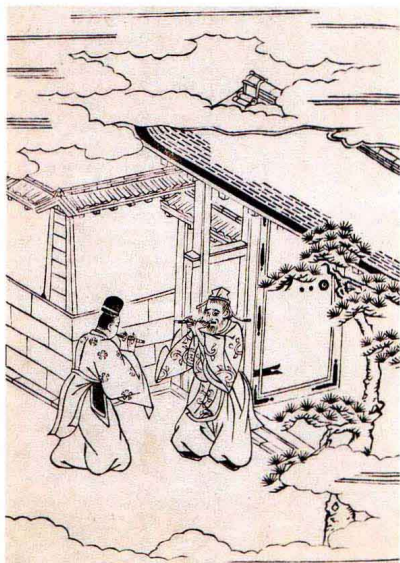
二七二ページ「平安京条坊図」。

二七三ページ「大内裏図」参照。

学習

□ この話の不思議に思われる点を整理してみよう。

□ 博雅の三位の笛の名手ぶりはどのように描かれているか、説明してみよう。



版本の挿絵



朱雀門復元模型

十訓抄

説話集。編者は六波羅二藤左衛門入道（生没年未詳）といわれるが、未詳。一二五二年（建長四）に成立。年少者の啓蒙を目的に編纂され、約二百八十話を十の教訓に分類している。本文は『新編日本古典文学全集』によった。

大江山

古今著聞集

① いづみしきぶ、保昌が妻にて丹後に下りけるほどに、京に歌合ありけるに、
 ② やすまさ
 ③ こしきぶのいし 小式部内侍、歌よみにとられてよみけるを、定頼の中納言、たはぶれに
 ④
 ⑤ さだより
 ⑥
 ⑦
 ⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳
 ㉑
 ㉒
 ㉓
 ㉔
 ㉕
 ㉖
 ㉗
 ㉘
 ㉙
 ㉚
 ㉛
 ㉜
 ㉝
 ㉞
 ㉟
 ㊱
 ㊲
 ㊳
 ㊴
 ㊵
 ㊶
 ㊷
 ㊸
 ㊹
 ㊺
 ㊻
 ㊼
 ㊽
 ㊾
 ㊿
 小式部内侍に、「丹後へつかはしける人は参りにたりや。」と言ひ入れて、
 局の前を過ぎられけるを、小式部内侍、御簾よりなかば出でて、直衣の
 袖をひかへて、

⑦
 ⑧
 ⑨
 ⑩
 ⑪
 ⑫
 ⑬
 ⑭
 ⑮
 ⑯
 ⑰
 ⑱
 ⑲
 ⑳
 ㉑
 ㉒
 ㉓
 ㉔
 ㉕
 ㉖
 ㉗
 ㉘
 ㉙
 ㉚
 ㉛
 ㉜
 ㉝
 ㉞
 ㉟
 ㊱
 ㊲
 ㊳
 ㊴
 ㊵
 ㊶
 ㊷
 ㊸
 ㊹
 ㊺
 ㊻
 ㊼
 ㊽
 ㊾
 ㊿
 大江山いくのの道の遠ければまだふみもみず天橋立
 とよみかけけり。思はずにあさましくて、「こはいかに。」とばかり言ひ
 て、返しにも及ばず、袖をひきはなちて逃げられにけり。小式部、これ
 より歌よみの世おぼえ出で来にけり。

5

① 和泉式部 一九六ページ解説参
 照。

② 保昌 藤原保昌(九六—一〇三六)。一
 〇二〇年(寛仁四)ごろ丹後守。
 丹後は今の京都府の北部。

③ 小式部内侍 ?—一〇二五。女流歌
 人。橘道貞の娘。母は和泉式部。



『百人一首画帖』

④ 歌よみにとられて 歌合のよみ
 手として選ばれて。

⑤ 定頼 藤原定頼(九九五—一〇四五)。
 公任の子。歌人。

⑥ 直衣 一〇ページ注②参照。

問 「大江山」の歌の掛詞を指摘せ
 よ。

学習

■「大江山」の歌は、定頼の言葉にどのように答えたことになるのか、考えてみよう。

■定頼が「『こはいかに。』とばかり言ひて、返しにも及ばず、袖をひきはなちて逃げ」（三・七）たのはなぜか、説明してみよう。

古今著聞集

説話集。編者は橋成季。なりすえ

の三十編に分類・編集した、説話の百科全書。本文は『日本古典文学大系』によった。

橋成季 生没年未詳。関白九条道家の隨身で、くじょうみちえ『古今著聞集』の成立時は五十歳くらいかといわれる。



『十訓抄』版本の挿絵

⑦大江山 今の京都市と亀岡市との境にある山。生野いくの（今の京都府福知山市）の北の丹後の大江山とする説もある。

⑧天橋立 丹後の国の歌枕うたまくら。今の京都府宮津市にある砂州で、景勝の地。

⑨歌よみの世おぼえ 歌人としての世の評判。

へいちゆう 平中が事

こほん 古本説話集

今は昔、平中^①といふ色好み、さしも心に入らぬ女のもとにても、泣かれぬ音をそら泣きをし、涙にぬらさむ料に、硯瓶^③に水を入れて、緒をつ^をけてひぢに掛けてしありきつ。顔、袖をぬらしけり。

出居^④の方を、妻のぞきて見れば、間木^⑤に物をさし置きけるを、出でてのち取り下ろして見れば、硯瓶^⑥なり。また、畳紙^⑦に丁子^⑧入りたり。瓶の水をいうてて、墨を濃くすりて入れつ。鼠^⑨の物を取り集めて、丁子に入れ替へつ。さてもとのやうに置きつ。

例のことなれば、夕きりは出でぬ。暁に帰りて、心地あしげにて、唾^{つばき}を吐き、臥^ふしたり。「畳紙の物の故なめり。」と、妻は聞き臥したり。夜明けて見れば、袖に墨ゆゆしげにつきたり。鏡を見れば、顔も真黒に、目のみきらめきて、我ながらいと恐ろしげなり。硯瓶を見れば、墨をす

10

5

①平中 平安時代の歌人、平貞文（？-一九三）の通称。「平中将」を略したなど諸説あるが、呼称の由来は不明。

②料に ために。

③硯瓶 硯で墨をするときに用いる水を入れておく器。

④出居 寝殿造で、南廂に設けた間。

⑤間木 長押の上に作った棚。

⑥畳紙 こは、丁子を入れるように折り畳んだ紙。

⑦丁子 フトモモ科の常緑高木。つぼみを乾

燥させ、香料や染料とした。ここ

は、口に含ま

んで香りを

出した。

⑧いうて 注ぎ捨て。

⑨鼠の物 鼠のふん。



りて入れたり。畳紙に鼠の物入りたり。いといとあさましく心憂くて、そののちそら泣きの涙、丁子く含むこと、とどめてけるとぞ。

学習

■妻はどのようにして平中の色好みをやりこめたのか、具体的に説明してみよう。

■「いといとあさましく心憂くて」(二五・一)とは、平中のどのような心情を述べたものか、考えてみよう。

古本説話集

説話集。編者は未詳。平安時代末期から鎌倉時代初期に成立。前半に和歌説話四十六話、後半に仏教説話二十四話を収める。現存する唯一の本に書名が記されておらず、『古本説話集』と通称されている。本文は『新日本古典文学大系』によった。